

ドーバー海峡

英独両国のビッグ・ガンとその戦い

Can fire at the Strait of Dover

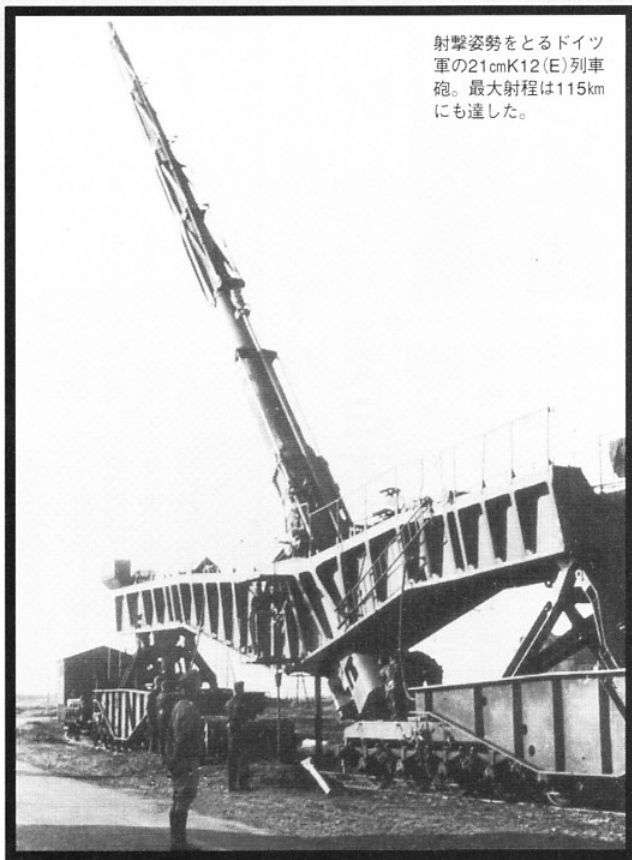
砲撃戦

文=廣田厚司

英本土を砲撃したドイツの長距離砲

一九四〇年五月、戦車と機械化部隊を先頭に疾風のような西方電撃戦で、低地諸国とフランスを占領したドイツ軍は、以降占領地の沿岸防衛計画を急速に進めることになった。ことにフランスのカレーからプロニュー・シュルメールに至る約五〇キロのドーバー海峡沿いの沿岸部は重要であり、機動力に優れた列車砲を含む、口径二〇センチ以上の巨砲二八門余りを装備する第240、242、244海岸沿岸砲兵大隊が配置された。その後、一九四二年から四三年にかけて、

海峡沿いフランス側バド・カレールの南方にあるウイムリューとサン・ガテに二種の巨大な要塞砲が建設された。前者は四万一七〇〇トンのビスマルク級戦艦の三八センチ主砲を利用した四基のトリート砲台（ジークフリート砲）で、備砲は長射程向きにクルップ社でオリジナル砲よりも葉室容積を広くしたものであった。最大射程は軽量弾を用いて五五・七キロメートル（重弾なら四二キロメートル）あり、直線距離で四六・八キロメートルある対岸のドーバー市とケント州南部が射程域に入った。サン・ガテに設置されたもう一種の巨砲



射撃姿勢をとるドイツ軍の21cmK12(E)列車砲。最大射程は115kmにも達した。

は、英艦隊を脅かす戦略艦（建造中止）として計画された五万六〇〇〇トン「H級」六隻に搭載される予定だった、四〇・六センチ主砲（大和級戦艦の主砲は四六センチ、米国のアイオワ級戦艦は四〇・六センチ）を三門転用したもので、リンデマン砲台と命名された（アドルフ砲、あるいはグロスドイッチュラント砲台とも呼ばれた）。同砲台は海軍第24沿岸重砲兵大隊により運用された。

この砲の射程は重量一・〇三トンの標準弾で五六キロメートル、炸薬を減らした重量〇・六トンの軽量弾では四二・三キロメートルであった。従って、距離三九キロのドーバー市は充分射程内に入り、英国にとってその威力から大戦中もっとも危険な砲と見なされていた。しかし、常時最大射程と最良精度は得られず、アドルフ砲の場合、最も精度が良くなるのは一七〇〜一八〇発の間であり、ジークフリート砲は二五〇発前後だった。

さらに、一九四〇年以降にバド・カレール地区グラバリースに一門のみが配備された高性能の二二センチK12列車砲の最大射程は一五キロにも達していた。この長射程を活かして、初めて英国に砲弾を撃ち込んだが、もっとも精度が良かったのは一〇〇発前後である。このK12列車砲はチャタム、シッティングボーン、クラクトン・オン・シーなどケント州を中心とする海峡沿いの町に砲撃を加えたが、このような長射程では砲弾の推進薬が大量に必要で、巨弾の割



ドーバー海峡を脱む
トート砲台の38cm
砲。有名なトート機
関が建設した砲台
で、分厚いコンクリ
ートによって充分に
防護されていた。「大
西洋防壁」の象徴と
してよく取り上げら
れるが、英国国民に
とっては、日常的な
脅威であった。

Gun fire at the Strait of Dover

に砲弾そのものの炸薬量が少なくなり、その結果英側の損害はそれほど大きなものではなかった。

これらの砲台や列車砲の他にも、グリユネ岬にグロツサー・クーアフルスト砲台が設置された。この砲台には口径二八センチ、射程三九・一キロメートルの砲が配備された。先の二砲よりも、口径も射程も小さいが、グリユネ岬―ドーバー市間が三六キロメートルと最短だったため問題はなかった。同砲台は一―四番砲台によって構成されていた。

後に、アルベルト・シュペーア軍需大臣が直接指揮し、フリッツ・トートSS大将の傘下にあったナチ党トート建設機関が大量の資材を投入して、海峡部を中心に長大な沿岸部に沿って、大小数千門の火砲を設置する火力拠点を建設した。これらの火網は先述の英国ドーバー市までとどく大口径・長距離砲も含み、「大西洋防壁」と呼ばれるようになる。

ドイツのドーバー砲の任務は戦況の変遷により影響があったにせよ、おおむね四つの目的があったといえる。まず、海峡を制圧すること、英国上陸作戦「ゼーレーヴエIIあしか」のための火力支援、ならびに心理戦面からする英国本土への砲撃、そして、大戦後半にヒトラーが予想したバド・カレーへの英・米上陸軍を阻止することである。

海峡制圧においては二六隻の艦船を撃沈したほか、大小さまざまな被害を艦船に与

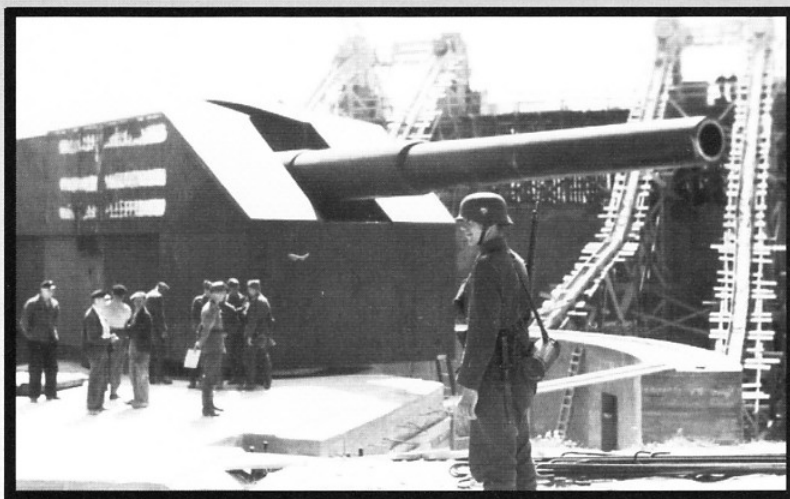
えることに成功した。英本土への砲撃では砲弾の着弾点を広範囲に分散させることで、民間施設の損害拡大を狙った。そのため、英国ではケント州南部が砲撃地区と呼ばれたほどである。

実際に人口一〇万人あまりの港湾都市ドーバー市の被害がもつとも大きく、大戦を通じて二二八四発の重砲弾が落下して、市庁舎や学校、病院、東西二か所の港湾設備や公共施設の他、民家もかなり破壊され、市の四分の一がなんらかの被害を受けた。人的損害もあり二一六名が死亡し、七六二名が負傷している。また、ラムズゲート、フォルクストンなどかなりの被害を受けたが、英国側の嚴重な事実秘匿により、ドイツ側にその損害の実態が漏れることはなかった。

当時、ドイツ要塞砲台からの砲撃を受けるドーバー市の市長は、後述する英国のワンストン砲台が砲撃すると、きまつてドイツ側の砲撃があり、これはつきり報復砲撃であろうと考えて、人的被害を避けるために、英側の砲撃を中止するように請願書を国会下院に提出したことがあった。しかし、ドイツ側の砲撃は一定周期をもって、広範囲に砲弾をばら撒いており、心理戦を狙っていることが明白だったので、この請願は採決されず、ワンストン砲台の砲撃も中止されることはなかった。

英国の長距離砲

一方、対岸の英国はドイツに比べて相対



①建設中のトート砲台。コンクリート製のトーチカに隠れている部分が見える。
②英国のワンストン砲台に設置された13.5インチ(34.3cm)砲。画期的な砲だったが、ドイツの巨砲との砲撃戦は行わなかった。



的にスケールこそ小さかったが、同じようにドーバー海峡沿いに巨砲を配置し、海峡を封鎖してドイツのドーバー砲に対抗し、上陸作戦を阻止しようとした。この計画の推進者は一次大戦時に海相を務めたウィンストン・チャーチル首相その人である。チャーチルはフランスがドイツ電撃戦の軍門に下った一九四〇年五月の段階で、英国への上陸作戦阻止のために長距離沿岸砲が必

要であることを予見し、早急な設置を参謀本部に命じたのである。
そこで、ブルース・フレージャー提督と兵器メーカーのウィッカース・アームストロング社が相談し、この分野における少数の専門家の一人で、一次大戦時に「ドイツ人バスター」と呼ばれたフランスの巨大な三・五・五センチ列車砲に詳しい、スチュワート・モンタギュー中佐を選んでウィッカー

ス社の開発チームに監督官として迎え、英国のドーバー砲計画を推進した。

この計画は、のちに海兵重砲連隊が運用する英国最大のワンストン砲台となった。この砲台はもともシンガポールに構築する予定だった砲台案が流用され、三万三〇八〇トンの旧式戦艦アイアン・デュークの一回インチ主砲(三・五・五センチ)を用いて、同年八月にドーバーのセント・マーガレットの白崖上に設けられた。

一番砲は「ウィーニー」と呼ばれ、二番砲は翌四一年二月に配置されて「ブー」と称された。完成してすぐにドイツ空軍のユンカースJr87急降下爆撃機の大襲撃を受けたが、幸い損害はなく、四〇年八月二十二日にフランスのカレーに向けて初弾を発射した。

さらに、少し遅れて同じ場所に一三・五インチ砲(三・四・三センチ)二門が配置された。この砲は英国の巨砲群でもっとも長射程を誇る近代的な火砲で、弾道学と技術的見地からしてドイツの先端火砲と比肩されるものだった。口径三四・三センチの砲身に二〇・三センチの旋条(溝)のついた

内筒を納め、三四・三センチの装薬筒に大量の推進薬を入れ、強力なコルダイト炸薬を充填した二〇・三センチ砲弾を発射する。砲弾と内筒旋条がびたりと噛み合う回転運動と二重構造の砲身によって最大射距離を得ようとするものだった。

やがてこの二門の砲は海軍本国艦隊司令長官の名に因みブルース砲と呼ばれるよう

になり、四三年三月三十日の試射で射程九・二キロメートルを達成した。なお、最大精度の発弾数は八〇・一〇〇発の間だったが、残念ながら発射時の砲身内高温により三〇発ほどで旋条が磨耗して、着弾精度が極端に悪くなるという問題が起こり、結局、ドイツの巨砲群との砲撃戦は行われなかった。

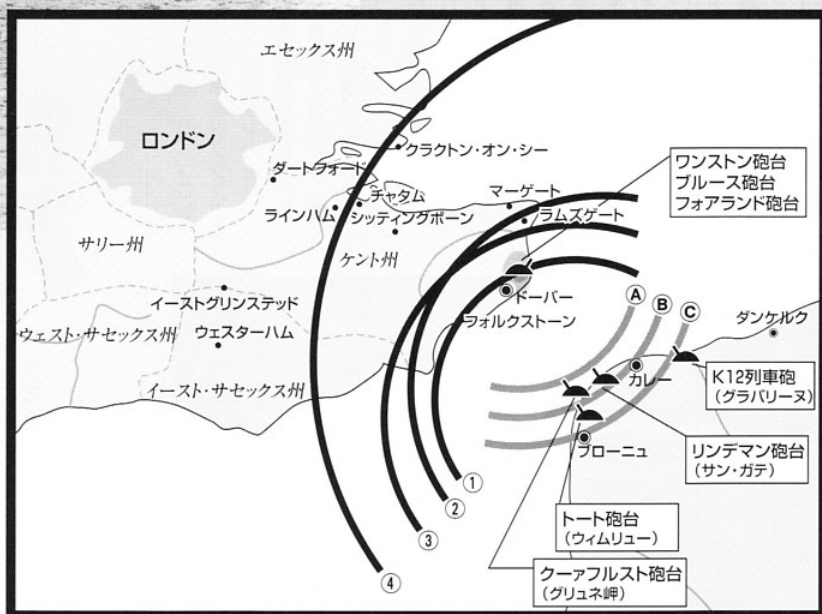
そのほかに、四〇年から四二年にかけて四門の一三・五インチ砲(三・四・三センチ)がガンストンのトンネルの中に隠蔽式に設置された。また、一九四二年から四三年にかけてワンストン農場に英国最大の火砲「ジェーン」と「クレム」と呼ばれる、五インチ砲(三八・一センチ)二門が配置された。この砲は三万六七・七トンのキング・ジョージ五世級戦艦の主砲で、射程は四四キロメートルだった。こうした巨砲以外に海兵重砲隊傘下の火砲として、二〇センチ砲クラスが、〇門ほどドーバー海峡沿いに配置されていた。

他方、陸軍も対上陸戦重砲兵隊を編成し、九・二インチ(二三・三センチ)砲から一・二インチ(三〇・五センチ)砲の、列車砲を含む二四門が「ケンティッシュ重砲」として一九四〇年にドーバー沿いに展開した。しかし、これらの砲台と列車砲の中で、ワンストンの火砲だけが対岸のカレーの郊外を砲撃できる巨砲であり、しかも本格的な射撃準備が完了したのは四二年の六月になっただけである。



セルベレス作戦でドーバー海峡を突破するドイツ艦隊。これら絶好の目標に英国の巨砲は砲弾を当てることはできなかったが、レーダー射撃の貴重な経験を得ることができた。

ドーバー海峡は英独両国にとっての最前線となった。砲の射程からドイツ軍の巨砲群が優勢である。射程はドイツの①クーアフルスト砲台②リンデマン砲台③トート砲台④21cm K12列車砲。英国のAフォアランド砲台Bワンストン砲台Cブルース砲台。



Gun fire at the Strait of Dover

両軍の砲撃

こうして、両軍は互いに保有する長距離砲をもって、距離約四〇キロメートル前後でドーバーを越えて砲弾の応酬を行った。英国に落下した最初のドイツ列車砲の砲弾は四〇年八月三十日である。

ドイツ側の砲弾は既述のとおり、比較的人口の多い海峡に沿った市街地に落下して被害を与えたが、遅れて四二年六月から行われた英国側の砲撃では、ドイツ砲台周辺がほとんど無人地帯であったので、損害を与えられなかった。以後、定期的に相互に砲撃が行われたが、弾着観測機を飛ばせず、双方ともに損害を確認する手段がなかった。

一九四二年二月十二日、ドイツの主力艦隊が昼間、ドーバー海峡を突破する「セルベレス（ケルベロス）作戦」が発動され、九・二インチ砲（二四センチ）四門からなる海兵重砲隊南フォアランド砲台が、目前を通過して行く艦隊を目標に三三発を発射したが、目標まで八キロメートルと近距離すぎて命中させることができなかった。しかし、この砲台はK型レーダーを装備し、たった一七秒間だけであったがレーダー射撃の機会に恵まれた。結果として砲弾の多くが重巡プリンツ・オイゲンの後方に落下してしまいが、英国側はレーダー射撃管制という貴重な実戦経験を得ることができた。他方、ドイツ側もフォアランド砲台に砲撃を加えて艦隊の航行を援護したが、英国と同様に命中は得られなかった。これが

ドーバー海峡砲撃戦として今日伝説的に語られることになったものである。

一九四四年六月のノルマンディー上陸戦から、フランスは連合軍の手に戻ったわけだが、カレー地区はしばらくの間、依然としてドイツ軍の占領下にあった。ノルマンディー上陸から約三か月後の九月十七日にカナダ第一軍がリンデマン砲台を包囲、空中には弾着観測機が飛来して、無線連絡により対岸のワンストン砲台が積年の敵に砲撃を開始した。だが、この日、一七四発が発射されたものの、三基の砲台に命中したのは一発のみだった。二日後の九月十九日にはグリユネ岬のクロッサー・クーアフルスト砲台を砲撃し、次第に砲撃精度が上がって二五発が命中した。その翌日、九月二十日には最大の敵だったトート砲台を砲撃して六発が命中したが、致命傷を与えることはできなかった。それから、九月二十六日の一日でトート砲台から六三発がつるべ撃ちに英国に落下し、ドーバー市にも損害が出た。このトート砲台によるこの日の攻撃がドイツのドーバー砲台最後の砲撃となり、結局、強固なトート砲台はカナダ地上軍によって九月三十日に陥落した。

この日、ドーバー市長は市民にグリユネ岬の最後の砲台がカナダ軍に占領されたことを知らせた。参謀本部からは祝電が届き、まるで大戦が終結したかのように市は沸きかえった。これが四年間にわたり、ドイツの長距離砲に悩まされた市民が解放された瞬間だった。